

《研究ノート》

中国における農業史研究の現況

—『中国農業科学技術史稿』の編纂と

農業史研究の新傾向—

渡 部 武*

I. はじめに

1987年5月から同年の9月まで、私は勤務校の東海大学と提携関係にある中国上海の復旦大学に交換研究員として滞在し、中国における農業史研究の現状についての考察活動に従事した。その概要については、すでに『東海史学』第22号（1987年刊）に「中国における農業史研究の現況——中国農業史研究機関訪問記——」と題して報告しておいた。この報告は、南京農業大学中国農業遺産研究室（実際は中国農業科学院に直属）・北京農業大学・中国農業博物館・西北農業大学古農学研究室・華南農業大学農業歴史遺産研究室・江西省中国農業考古中心などの研究機関、ならびに若干の農業科技史研究者について記したもので、見聞の一端を述べたものに過ぎない。まだ報告すべきことは多く残されており、その中で書き漏らしたことは二つある。第一は、各農業史研究機関および復旦大学図書館特蔵部に架蔵されている古農書の管見報告、第二は、中国全国の主要農業史研究機関の研究者の総力を結集して編纂が進められている、大著『中国農業科学技術史稿』のことである。本稿では第二の点を中心にして、二、三の中国農業史研究者の新しい研究動向を紹介してみたい。

*わたべ たけし、東海大学文学部

Ⅱ. 『中国農業科学技術史稿』の編纂について

中国は、農業国と称されながら、これまで中国人の手によって書かれた中国農業科技史に関するすぐれた通史は乏しかった。強いて挙げるとしたなら、中国農業科学院・南京農学院（現南京農業大学）中国農業遺産研究室編著『中国農学史（初稿）』（全2冊，科学出版社，北京，B5，466頁）であろう。本書は萬国鼎・劉毓琰・鄒樹文（鄒氏は『中国昆虫学史』〔科学出版社，北京，1981年刊，B5，242頁〕なるすぐれた著作を残している。本書は近く思索社から邦訳が刊行される予定）・繆啓愉・李長年・章楷・陳祖棨・鄒介正などの諸氏が執筆を担当しておられる。内容は、西周時代から清朝時代に至るまでの代表的な中国古農書を分析紹介した農業通史で、上冊は30年も以前の1959年に刊行されたが、途中、文革で作業が中断し、完結したのは1984年のことである。この間に編纂の中心的役割を果たしてきた萬国鼎氏は没している。本書は非常に水準の高い概説書で、今後このような農業通史は再び著されることはあるまい。ただ難を言うならば、文革以後の目覚ましい考古学上の成果が摂取されていないことである。また近年、民族学や文化人類学も隆盛になりつつあり、農具を含めた民具などに関する物質文化のデータは飛躍的に増大している。また中国社会学会の復活により、農村の社会構造に再び調査のメスが入れられようとしている。したがって今日、『中国農学史』を凌駕する、最新の成果を盛り込んだ新たな中国農業通史の出版が待望されるわけである。

ちょうど私が復旦大学に滞在中、前述の待望の書の編纂が進行中であることを小耳に挟んだ。そして偶然にも、その二稿と三稿とを目睹する機会に恵まれた。原稿の総タイトルは『中国農業科学技術史』で、後日仄聞したところでは、編纂総責任者は華南農業大学の梁家勉教授で、編集庶務と渉外関係は同大学農業歴史遺産研究室副主任の彭世奨助教が担当しておられるとのことであった。また原稿執筆の主力は中国農業科学院農業遺産研究室の諸研究員で、これに農業科学院系列下の諸研究所および各農業大学の農史研究者が参画しているとの

ことであった（本書の編纂に至る経過については、1987年9月の北京における中国農史学会成立大会の席上で、王笈武氏が簡略な報告をしている。雑誌『農業考古』1988年1期に開会報告の全文が掲載されている）。

ここで中国農業科学院について簡単に説明しておく、当院は中国最大の国立農業研究機関で、主として農業応用科学技術および基礎理論の研究、ならびに科学者の養成を目的に、1957年に創設された。系列下には、研究所33箇所、研究生院（大学院に相当）と農業図書館が各1箇所ある。33の研究所の内訳は以下の通りである（南京農業大学の曹幸穂君提供の『中国農業科学院』便覧、1983年版による）。

土壤肥料研究所(北京)	畜牧研究所(北京)
作物品種資源研究所(北京)	蔬菜研究所(北京)
原子能(原子力エネルギー)研究所(北京)	科技情報研究所(北京)
農業経済研究所(北京)	養蜂研究所(北京)
農業自然資源・農業区画研究所(北京)	農業気象研究室(北京)
生物防治研究室(北京)	農業遺産研究室(南京)
棉花研究所(河南安陽)	油料作物研究所(武漢)
果樹研究所(遼寧興城)	鄭州果樹研究所(鄭州)
柑橘研究所(重慶)	甜菜研究所(黒龍江呼蘭)
茶葉研究所(杭州)	煙草(タバコ)研究所(山東益都)
麻類研究所(湖南沅江)	農業灌漑研究所(河南新郷)
畜牧研究所(蘭州)	草原研究所(呼和浩特)
哈爾濱(ハルビン)獣医研究所(哈爾濱)	蘭州獣医研究所(蘭州)
上海家畜血吸虫病研究所(上海)	中獣医研究所(蘭州)
特産研究所(吉林左家)	蚕業研究所(江蘇鎮江)
作物育種栽培研究所(北京)	水稻研究所(杭州)
植物保護研究所(北京)	

上記のような組織を背景として『中国農業科学技術史』を刊行しようとするのであるから、これは国家的事業とも言える。私が拜見したところの二稿と三

稿は、タイプもしくは孔版印刷による各章分冊本で、一部欠本があったものの、ほぼその全容を知ることができた。本書の出版は1988年中になされるはずであったが、最近の中国の「科技新書目」によると、予定が大幅に遅延して1989年12月に北京の農業出版社から刊行されるとのことである。版型はB5、全100万字、まさに大著である。だが二稿、三稿の方がはるかに分量が多く、最終原稿は第五稿目で、ここに至るまで相当の推敲を経て、原稿を凝縮したことが考えられる。また書名も『中国農業科学技術史稿』と「稿」の一文字を付しているの、今後、改定版も考慮した暫定稿の意味もあるのであろう。

本書の紹介は、五稿の出版を待つて行うのが本筋なのであるが、中国の出版事情は刊行予定より半年、あるいは一年遅れるのは普通のことなので、出版情報を日本の読者に早く流すことを考えて、あえて二稿および三稿の内容を紹介することにした。

本書の内容がいかなるものであるかは、以下の目次を見ていただきたい。

第1章 農業の起源と原始農業生産技術（中国農業科学院農史研究室印、二稿1981年1月刊、全65頁。三稿1982年8月刊、全57頁。游修齡・李自振執筆、三稿に劉敦愿が加わる）以下三稿の目次を示しておく。

- 第1節 農業の起源
- 第2節 原始農業の生産技術
- 第3節 原始的農業栽培
- 第4節 原始的な家畜飼育
- 小 結

第2章 夏・殷・西周時代の農業科学技術（同上印、二稿1981年6月刊、全60頁。三稿1981年6月刊、全70頁）二稿第5節「畜牧業の発展と飼養技術の進歩」は三稿第6節よりもやや詳細。以下三稿目次を示しておく。

- 第1節 物候・暦法および農業気象学の萌芽
- 第2節 青銅農具の出現と多様な農具の発展
- 第3節 作物の種類と園圃・林業の萌芽

第4節 耕作栽培技術の発展

第5節 穀物貯蔵庫の出現と農副産品加工

第6節 飼養業の発展

小 結

第3章 春秋戦国時代の農業科学技術（同上印，二稿1981年3・4月刊，郭文
翰執筆）一部欠落あり。閲読分目次は以下の通り。

第3節 農業資源の分布に対する初歩的認識

第4節 伝統農業科学技術の基礎の確立時代

第5節 園林牧蚕の科学技術

第6節 『呂氏春秋』上農四篇簡介

三稿（全101頁）の目次は以下の通り。

前 言

第1節 鉄製農具と畜力耕作の使用

第2節 農田水利建設の興起

第3節 伝統農業科学技術の基礎の確立

第4節 園林牧蚕技術

第5節 『呂氏春秋』上農等四篇

第4章 秦漢時代の農業科学技術（二稿1981年6～10月刊）閲読分目次は以下
の通り。

第1節 鉄製農具の発展と畜力耕作の普及（39頁）

第2節 農田水利の重大発展（21頁）

第3節 秦漢時代の農業気象科学技術の発展（14頁）

第10節 秦漢時代の園芸技術の発展（13頁）

第11節 ①獣医薬の完成 ②畜牧技術（17頁）

第15節 農書と農学家（10頁）

三稿（全97頁）の目次は以下の通り。

前 言

第1節 鉄製農具の発展と牛耕の普及

- 第2節 農田水利の発展
- 第3節 輪作の発展と耕作技術の向上
- 第4節 土壌改良と施肥技術の向上
- 第5節 適時の播種， 妥当な管理および種子の防虫処理貯蔵
- 第6節 代田法と区田法
- 第7節 果樹・蔬菜栽培技術の発展
- 第8節 畜牧獣医技術の発展
- 第9節 蚕桑技術の発展
- 第10節 (欠)
- 第11節 『汜勝之書』と『四民月令』

第5章 魏晋南北朝時代の農業科学技術（中国農業科学院・南京農学院中国農業遺産研究室印，二稿1981年11月刊，全152頁）

前 言

- 第1節 農具の改良と発展
 - 第2節 農田水利と土地利用
 - 第3節 農作制度と土壌耕作
 - 第4節 作物栽培と種子選別技術の発展
 - 第5節 園芸科学技術
 - 第6節 植樹造林科学技術
 - 第7節 畜牧技術の完成
 - 第8節 養殖業
 - 第9節 『齊民要術』についての紹介と評価，（附）『齊民要術』伝承考
- 小 結

三稿（あるいは初稿か，全123頁）の目次は以下の通り。

前 言

- 第1節 農具の改良と発展
- 第2節 農田水利と屯田
- 第3節 農作方式の発展

第4節 耕—耙—耨による耕作技術体系の形成

第5節 優良品種の繁育

第6節 播種より収穫に至るまでの技術発展

第7節 果樹・蔬菜栽培技術の進歩

第8節 植樹技術と植林経営

第9節 畜牧獣医技術の完成

第10節 養蚕・養蜂・養魚

第11節 農副産品加工

第12節 賈思勰と『齊民要術』

小 結

第6章 隋唐五代時代の農業科学技術（中国農業科学院農業技術史研究室印，
修改稿，全149頁）

前 言

第1節 農具の考案と改良

第2節 農田水利の興起とその達成

第3節 大田耕作栽培技術の継続的發展

第4節 果樹・蔬菜・園芸技術

第5節 茶樹およびその他の林木栽培技術

第6節 畜牧と獣医技術

第7節 蚕桑生産とその技術

第8節 漁業生産技術（暫欠）

第9節 隋唐五代の農書

三稿（中国農業科学院・南京農学院中国農業遺産研究室印，1982年8
月刊，全80頁）の目次は以下の通り。

前 言

第1節 農具の考案と改良

第2節 農田水利の興起とその達成

第3節 耕作栽培技術

第4節 果樹・蔬菜・園芸

第5節 茶樹とその他の林木栽培技術

第6節 畜牧と獣医

第7節 蚕桑生産とその技術

第8節 農書

小 結

第7章 宋元時代の農業科学技術（中国農業科学院農史室印，二稿1981年7月刊，全167頁。三稿は中国農業科学院・南京農学院中国農業遺産研究室印，1982年8月刊，全152頁）二，三稿はほぼ同内容なので，以下二稿の目次のみ示しておく。

前 言

第1節 新しい農具の考案と農器図譜

第2節 中小型農田水利施設の発展と土地の充分な利用

第3節 肥料の積貯と合理的施肥

第4節 水田の精耕細作技術の定着と畑作耕作技術の継続的発展

第5節 江南における多毛作栽培技術の急速な発展

第6節 綿・麻・甘蔗等の商品作物の普及

第7節 蔬菜・果樹品種の発展と花卉栽培の興起

第8節 蚕桑・茶・林木等の生産技術の完成

第9節 畜牧獣医・水産養殖技術の発展

第10節 農業科学技術の普及と向上

小 結

第8章 明清時代の農業科学技術（中国農業科学院・南京農学院中国農業遺産研究室印，二稿1981年8月刊，全6分冊，全240頁）

前 言

第1節 農具の多機能化と小型化の傾向

第2節 農田水利と土地利用技術の継続的発展

第3節 肥料の積貯と施肥技術の発展

- 第4節 明清時代の農業科学技術の発展
 - 第5節 優良品種の選育技術の発展
 - 第6節 品種の導入と馴化に対する認識の向上
 - 第7節 作物の組み合わせと栽培方式の発展
 - 第8節 土壤耕作技術の向上
 - 第9節 播種・育苗・移栽等の技術面における考案
 - 第10節 田間管理と収穫貯蔵におけるいくつかの技術的発展
 - 第11節 果樹・蔬菜・林木栽培技術の発展
 - 第12節 桑栽培と養蚕技術の発展
 - 第13節 畜牧獣医技術の発展
 - 第14節 (待補)
 - 第15節 農書と農学家
- 小 結

三稿（1982年8月刊，全219頁）の目次は以下の通り。

前 言

- 第1節 農具の多機能化と小型化の傾向
 - 第2節 農田水利と土地利用
 - 第3節 肥料の積貯と施肥技術
 - 第4節 作物の選種と優良品種の選育
 - 第5節 作物の組み合わせと多毛作方式
 - 第6節 土壤耕作技術の向上
 - 第7節 作物栽培管理技術
 - 第8節 果樹・蔬菜・林木栽培
 - 第9節 桑栽培と養蚕
 - 第10節 畜牧獣医
 - 第11節 農書と農学家
- 小 結

以上、本書は新石器時代から清朝時代、正確に言うならば、19世紀半ばのアヘン戦争前までの農業史を扱っている。中国の歴史学界ではアヘン戦争以前までを‘古代’とするのが常識となっているが、これはわれわれの言うところの‘前近代’ほどの意味にとっておけばよい。

本書に取められた中国農業史の時代区分は、やはり各時代に著された農書の分析結果に依拠しており、そういう意味では『中国農学史（初稿）』で達成された成果がよく生かされている。中国農業は、秦嶺—淮河線で区切られた南北地域でそれぞれ発達の状態を異にしており、本書でも北方の畑作と南方の水稻作が、いかにして労働集約型の精耕細作にたどり着くに至ったかを克明に追跡している。ことに農具の変遷と農法については、最近の考古学の成果をよく盛り込んでおり、少し以前のころと比べると、殷・周時代の農業史研究は長足の進歩を遂げている。それは清末民初の劉鸞・羅振玉・王国維以来、現今の胡厚宣氏に至るまでに蓄積されてきた甲骨金文学の伝統、および北京大学考古系と全国各地の博物館の発掘活動のおかげでもある。これに関連して、甲骨文に見られる農業技術を含めた科学技術全般について、四川省成都市の巴蜀書社の編集者である袁庭棟氏が、温少峰氏とともに『殷墟卜辞研究—科学技術篇一』（四川省社会科学院出版社、成都、1983年刊、B5、391頁）なる著書を公刊しており、殷代の農業水準を知る上での絶好の便覧となっている。私は成都に滞在している時に、上海の胡道静先生の紹介で袁氏に面晤する機会を得た。中国の出版社には袁氏のように編集者の肩書をいただくかわら、自ら立派な研究を發表している方が往々にしており、この点、私は認識を新たにした。

第4、5章の秦・漢・魏晉南北朝時代の条でも顕著なのは、出土文物を資料にした農業技術の説明である。特に私が興味を覚えたのは、漢代の墳墓から出土した「陂池稻田模型」である。本書は、この陂池稻田模型と漢代の農書『汜勝之書』および北魏時代の農書『齊民要術』に見られる水稻作とを結びつけて解説している。これは望ましい研究態度である。現在、陂池稻田模型は陝西・四川・貴州・広西・広東の諸省から出土しているが、陝西省の場合、勉県からこの種の模型が数点発見されており、漢水流域を遡って稲作が伝播していった

ことをうかがわせる。この陂池稻田模型に見られる農業技術については、すでにわが国では岡崎敬氏が、1958年に『考古学雑誌』第44巻第2号に「漢代明器泥象にあらわれた水田・水池について—四川省出土品を中心として—」という先駆的な論考を發表している。しかし、当時と比べて現時点ではこの種の模型の出土数は、はるかに増大している。私自身も、その実物もしくはレプリカを北京の農業博物館、成都の四川省博物館・成都市博物館および広州市の広東省博物館で見たことがあり、従来の報告書に未発表のものもあって、非常に興味深く思えた。これらの模型は、成都周辺から発見される漢代風俗画像磚を併用して、さらに詳しく分析する必要がある。

歴史文献が圧倒的に豊富となってくる第6章の隋・唐時代以後については、社会経済史および水利史・畜牧史・茶業史・蚕桑史・園芸史等の分野の研究成果が十分に咀嚼吸収されている。新中国成立以後の中国歴史学界の研究傾向は、マルクスの唯物史観が主流を占めていたが、文革集結以後は唯物史観を絶対視する傾向は揺らいできている。例えば、近年相次いで逝去した傅筑夫・傅衣凌両氏に代表されるように、中国の社会経済史全般、もしくは断代史の社会経済史研究に堅実な実証史学が導入され（傅筑夫氏には『中国封建社会経済史』『中国経済史論叢』『中国古代経済史概論』が、傅衣凌氏には『明清社会経済史論文集』『明清農村社会経済』『明清江南市民経済試論』などの著作がある）、公式論的な見解は影をひそめつつある。本書執筆に用いられた社会経済史文献には、農書を筆頭にして、水利書・方志（地方誌のこと）・土地文書等が含まれており、茶書や花卉栽培書などの専門農書および方志には、わが国では容易に見られないものが多数ある。それだけでも一読の価値がある。

ところで前掲の目次を通覧しても分かることであるが、本書の各章の構成は、各時代の農具・農田水利・農作方式・園芸栽培・蚕桑・畜牧獣医・農書の記述を柱にして成っている。このことは、現中国の農業科学院や農業大学などの研究機関における縦割りの専門分野を顕著に反映している。このような多くの分野にわたる農業科技史を一本にまとめて編纂可能にしたのは、1950年代の中国の古農書の再評価と伝統農業の見直し政策を、一貫して強力に支持してきた農

業部副部長劉瑞龍氏の力によるところが大きい。劉瑞龍氏の談話によれば（『值得珍視的中国農業歴史遺産』、『百科知識』1981年3期所収）、今回の『中国農業科技史稿』の編纂意図は、「石油農業」「エネルギー密集型農業」「無機農業」に対する危機意識から、伝統的な「有機農業」や「生態農業」を見直すところに発しているとのことである。ところが残念なことに、昨年（1988年）の春、劉氏は出張先の広州の華南農業大学で客死された。私の友人でもある江西省博物館の劉小燕女史から書信でそのことを知らされ、いささか驚かされた。中国の農史学界にとっては重要なパトロンを喪失したことになり、まことに痛恨の極みである。また本書の総編集を担当した華南農業大学の梁家勉教授の学識と人望も、本書完成の原動力となっている。梁教授は「東“萬”西“石”北“毓瑚”，いま南天の一柱を剩（あま）すのみ」（梁教授八十寿を祝賀した『農業考古』主編陳文華氏の祝詞）とあるように、南京農大の萬國鼎、西北農大の石声漢、北京農大の王毓瑚らの三教授とならんで農史学界の四老に数えられているが、現在活躍しておられるのは梁教授お一人となってしまわれた。梁教授の農史史料の取り扱い方には定評があり、本書編纂に最良の主編を得たことは間違いない。ともかくも本書刊行の暁には、われわれ読者にとって中国農業史の発展構造が、より理解しやすくなることであろう。

Ⅲ. 学際研究による農業史研究

これまでの中国における農業史研究の欠点のひとつとして、実態調査にもとづく考察不足を指摘できる。しかしながら、近年こうした様相に変化が生じてきている。人類学・民族学・民俗学・社会学などの再興により、'跨学研究'つまり'学際研究'が盛んになりつつある。

北京の農業博物館で報告を行ったおり、はじめて面識を得た李根蟠氏（中国社会科学院経済研究所経済史研究室）などは、学際的研究を積極的に推進している中堅研究者の筆頭と目されている。かつて私は、李根蟠と盧勛両氏（同民族研究所）の共著論文「我国原始農業起源于山地考」（『農業考古』1981年創刊

号所収)を雑誌『東南アジア』11号(1982年)に紹介したことがある。李氏は西南中国少数民族の実態調査を精力的に行っており、現代文明の洗礼を蒙って日々変貌を遂げつつある少数民族の農業の実情を記録し続けてきた方である。元来が中国古典に精通した歴史研究者なので、古典文献に見られる農法や農具の解釈について、実地調査の見聞を生かした傾聴に値する説をしばしば発表している。李氏から直接恵送された近著『中国南方少数民族原始農業形態』(盧氏との共著、農業出版社、北京、1987年刊、A5、534頁)は、そういう意味ではこれまで李氏らが蓄積してきた研究の総決算とも称せる。本書の特色は、農耕文化の発展理論としてはモルガンの『古代社会』(1877年)やハーランの『作物と人間』(Harlan, J. R., "Crops and Man", 1975)を下地に行っているが、利用されている中国少数民族のモノグラフの豊富なことには瞠目させられる。ただ少数民族間の農業形態を中国古代の農業形態とパラレルに取り扱うことについては、いろいろ問題もあろう。だが、かつての観念的な「耒耜論争」に象徴される文献主義者に反省を促したことは確かである。またつい最近、本書の姉妹篇とも言うべき『中国原始社会経済研究』(黄崇岳・盧助との共著、中国社会科学出版社、北京、1987年刊、A5、485頁)も刊行された。

李根蟠氏と同様のタイプの研究者としてもう一人紹介しておきたいのは、陝西省の西北農業大学古農学研究室主任、張波助教授である。張氏は渭水盆地を中心とした陝西地方の農業技術史に精通した四十歳代前半の農史研究者である。古農学研究室を訪問した際に頂戴した論文「浅談段玉裁《説文解字注》的農事名物考証」「読《詩》辨稷」のタイトルからも分かるように、張氏は小学(文字学)や古典にも明るい。最近、雑誌『農業考古』1987年1期に発表した論考「周畿求耜—関于古代耒耜耕の実験、調査和研究報告—」は、古来多くの論争を呼び起こしてきた「耒耜」についての新説である。本稿の特色は、関中地方に旧来より伝えられてきている伝統的農具使用の遺風調査を踏まえていることにあり、その年の陝西省優秀論文の一等賞の榮譽を獲得している。しかし、私が感心させられたのは、張氏が文献にのみ依存した従来の自己の研究を、実地調査の面から修訂したことである。この論文は「今日の我を以て、昨日の我を否

定す」という言葉で結ばれているが、この言葉の中に中国農業史の新しい息吹を感じとることができる。

ところで、近年中国では少数民族についての調査報告が陸続と出版されており、その中には、これまでほとんど知られていなかった少数民族の農業実態調査報告がかなり含まれている。このように多くの調査報告書が公刊されるようになったのは、多民族国家を標榜する中国にとって、新たに Ethnic Group を認定し直して、各族の代表を各級の人民代表大会に送り出す必要があったからである。そのため1953年以来「民族識別工作」と称される、一連の少数民族識別調査が実施されることになった（詳しくは1978年9月に中国人民政治協商会議全国委員会民族組会議の席上でなされた社会人類学者費孝通氏の報告「関于我国民族的識別問題」【『民族与社会』人民出版社、北京、1981年刊所収】を参照のこと）。そして55の数の少数民族が認定されたのである（正式に認定されたグループを「〇〇族」と称し、未定のグループを「〇〇人」と称して区別している）。

この民族識別工作に付随して、現在「民族問題五種叢書」と称される少数民族についての五種類の報告書が刊行中である。その内訳は、①民族社会歴史調査資料叢刊、②民族簡史叢書、③民族簡誌叢書、④民族語言簡誌叢書、⑤民族自治地方概況叢書、となっている。この中で①の叢刊に最も多くの少数民族の農業記事が見出せる。またこれらの調査を通じて多くの若手フィールドワーカーが育成されていった。

雲南を訪問中、いつも私に随行して世話をしてくれた雲南省社会科学院（現在は中国雲南省民族博物館準備室に所属）の尹紹亭氏もそうした若手民族学徒の一人である。尹氏は西南中国少数民族の農業史を専門に研究している。日本語が堪能で、渡部忠世氏の『稲の道』（NHK ブックス）を中文訳しており、尹氏自身も以下の論考を発表している。

「雲南少数民族在日本文化源流研究中的地位」、『民族学与現代化』1985年1期。

「説“瘴”」、『雲南方志』1986年4期。

「雲南農耕低湿地水稻起源考」,『中国農史』1987年3期。

「基諾(ジノー)族刀耕火種的民族生態学研究」(モノグラフ)1987年タイプ印刷,後に『農業考古』1988年1期に再録。

「雲南山地民族農耕的產生及發展」,『雲南文史叢刊』所収。

「雲南青銅文化地理初論」,『雲南社会科学』1986年6期。

また今年の正月に頂戴した私信によれば,尹氏は20万字にのぼる『雲南刀耕火種研究』を脱稿されたとのことである。本稿は8章からなり,景頗・布朗・基諾・佤・独龍・怒・瑤・哈尼・克木・拉祜・德昂・墨勒等の雲南焼畑諸民族の農作の現状を詳述した専門的著作である。私は尹氏と一緒に雲南地方を旅行していた時に,近年の焼畑から水稻耕作への転化および乱開発により,この地方に大規模な'水土流失'(エロージョン)が発生していることを教えられた。しかもそれは雲南地方の気象にまで影響を及ぼしているほどで,事態はきわめて深刻である。今後の開発にはこうした調査報告が生かさなければならないであろう。しかし,最近の中国の出版事情は堅実な学術書の刊行を困難にしており,本書もその例に漏れず出版は宙に浮いたままである。本書を日本のどこかの出版社で翻訳出版できないものであろうか。

雲南地方の旅行でもうひとつ印象に残ったのは,昆明市郊外の中国科学院昆明植物研究所を訪問したことである。ここの副所長の裴盛基氏は尹氏と旧知の間柄で,雲南地方の少数民族と植物との関わりを長年研究しておられる。いわば'植物民俗学'のようなことをやっておられる。裴氏からうかがったところによると,1987年3月27日から4月5日にかけて,西双版纳(ここに科学院の熱帯植物研究所がある)で国際シンポジウム「第1回民族植物学講座」が開催され,この席にいろいろな分野の研究者が参集したとのことである。また日本からの参加者はなく,もし日本においてこの方面に関心のある研究者がおれば,ぜひ連絡して欲しいとの要請があった。

以上が1987年度の訪中見聞の補遺である。少々鮮度が劣ってしまったが,読者諸賢の参考になれば幸いである。なお私は中国滞在中にいくつかの宿題を課せられた。第一は中国稲作史の研究紹介,第二は胡道静氏のすぐれた農書およ

び農業科技史研究の翻訳，第三は中国少数民族農業史の研究紹介である。第一については江西省社会科学院の陳文華氏と共編で『中国の稲作起源』（六興出版，1989年刊）を刊行し，第二については『中国農業科学技術史論集』（仮題，農文協）と題して，どうにか出版できる見通しがついた。しかし，すべての宿題を完成するには，まだ当分時間がかかりそうである。